



退職後八年間を振り返って

「教育現場とつながり続ける」

全国公立学校退職教頭会 副会長 河田 龍夫

令和元年、全国公立学校退職教頭会の副会長として参加させて頂いています。よろしくお願ひします。

まずは、自己紹介をさせていただきます。

昭和二七年に山口県玖珂郡美和町という田舎町に生まれ、今は六八歳になりました。小学校・中学校・高等学校と十八年間美和町で過ごしました。大学は大阪です。ちょうど「大阪万博」の年で万博に四回行きました。人の多さと行列の長さに圧倒されました。さらに、梅田駅前の「スクランブル交差点」や「動く歩道」など田舎者にとってはビックリすることばかりでした。大学を無事卒業して、山口県で教員になりました。一九八〇年代・一九九〇年代は「荒れた学校」の全盛期にあり、当時は生徒達と追いかけてこの毎日でした。しかし、同窓会は、この当時の教え子が一番多いです。

最後の二年間は、教頭として地元の美和中学校の教頭として務めました。退職の年に、女子バレー部の顧問として、ほとんど

毎日が練習や練習試合をしていました。

平成二四年三月に退職して、八年目が終わろうとしています。この八年間ずっと色々な形で、学校と関わっています。

退職した年から、美和中学校のコミュニティ・スクール(学校運営協議会)の委員として、中学校と地域とのパイプ役として活動を始めました。また、美和スポーツクラブの理事として、地域の行事やプールの監視員など手伝いをしています。そして、令和元年より副会長としてスポーツクラブの計画・実施に協力しています。この年に、山口県公立学校退職教頭会に入会しました。勿論、岩国市・和木町公立学校退職教頭会(かなめ会第一地区)にも入会しました。二年後に、先輩の先生からかなめ会第一地区の代表幹事を任され、県の公立学校退職教頭会の幹事とかなめ会第一地区のお世話をさせていただきます。

平成二六年四月からは、コミュニティ・スクールの会長として、校長に学校の運営などの助言をしています。また、山口県独自の「地域教育ネット」(地域で小学生・中学生・高校生を育てよう)の会長として地域の様々な団体と協力して、夏休みに町内の小・中・高の教職員と研修会を開催しています。また、岩国市育成市民会議の美和地区長として、青少年(高校生以下)が健全に成長するために様々な運動を推進しています。

同じ年に、「岩国市教育支援教室」という、不登校の生徒の支援に関わる仕事に就きました。岩国市は不登校の児童・生徒が大変多いため、岩国市が設置した教室です。平成二八年より「美和教育支援教室」を設置して不登校の生徒と一緒に勉強しています。

平成二七年度には、山口県内の全ての小学校にコミュニティ・スクールを立ち上げるようになりました。美和町は小さな町なので二つの小学校に運営委員となる人材が少なく、小中合同のコミュニティ・スクールを立ち上げ、会長・副会長は中学校の会長・副会長が兼ねることにしました。同時に、小・中学校別々に

実施していたPTAの歓送迎会を小中合同で実施しました。このように、この年より小中連携を本格的に始めました。

退職して八年、生まれ育った美和町という小さい町の恩返し(美和町の子供たちのために)と思つて、色々な役職を引き受けてできる限りのことに取り組んでいます。

現在は、東小学校(七一名)・西小学校(六八名)・美和中学校(六六名)の三校に、ほぼ毎日訪問し、校長・教頭先生を始めほとんどの先生(特に初任の先生)と声を交わしています。勿論授業参観に積極的に参加していますが、一番の狙いは児童・生徒の登校状況です。休みがちの子どもがいる場合は、担任や教育相談の先生と相談します。又、毎年が採用されて赴任します。発達障害と思われる児童・生徒の割合が増えてきて、その子供たちには個別指導が必要です。しかし、個別指導に必要なスタッフ(支援委員など)が不足しています。

その原因は、教員希望者の減少や退職教員の再雇用の減少、退職教員の免許更新(昭和三十年生まれ以降の教員免許)の辞退があります。私の後輩達は、半分以上の者が更新はしないと云っています。

全国学力テスト・体力テスト・英語・言語能力・教育機器・などなど、それらを学ぶのは一人の子どもです。

学校現場は大変です。その先生方にこれからも寄り添っていききたいと思つています。



各県の会報誌に掲載された会員の投稿文から選んで載せてあります

東京都小

東京都公立小学校退職
教頭・副校長会

「良くぞここまで来たものよ」

会長 野沢 宏治

あと十ヶ月ほどで喜寿となる。「喜」の字の草体が七十七と読まれるところから七十七歳のこと。また、「七十七歳の賀の祝い。」「喜の字の祝い。」と言われている。

ここまで生きてくると、気持ちとは裏腹に体のあちこちに変わ調を覚えてくる。足の運びが重くなってきたと感じたのは七十歳に近づいた頃だった。若い頃は町の中をスイスイと大股で歩けたのに、エンジンがかかるまでに時間を要する。また、自転車を止めようとした時、バランスを崩して、自転車と一緒に転倒しそうになったこともあった。その都度、体の衰えに気づいていかねばならないわけである。

身近な町会のゴルフ仲間の一人は、癌で亡くなった。七六歳だった。また、七五歳の左官屋さんは今、胃癌で入院中である。夫婦共々元気で過ごせることが何よりであるが、この歳になると、何時何があってもおかしくない歳になっていることを自覚しなければならぬ。

同じゴルフ仲間、奥さんがリウマチで左手が変形し家事が困難になったため、介護のためゴルフを止めた人。昨年、奥さんが部屋を掃除機で掃除中、脳内出血で突然倒れ、いまだに植物人間状態だとのこと。六六歳ですい臓癌で夫を亡くした仲間等々。私の極々身近で親しいほぼ同年輩の人たちである。

そういう私も、妻が難病の一つである「パーキンソン病」と宣告されたのが、四年ほど前である。本人は、この病を受け入れるようになってきたが、四年ほど前のように対応していったらよいか迷っている。今、歩行困難で、一人で外出することは出来ない状態である。

いる。

「老老介護」が現実となった事を自覚していかねばならない。

その瞬間を待つ

伊野 俊行

全てのペースが違う。少なくとも自分の意志で、かなりコントロールできる。これをする？これをしない？選択の幅が広い。そんな新しい生活が始まって、三年が過ぎた。最初は新鮮だったものも、何となく定着感があり、落ち着いてきたと言えるだろうか。

最初の一年は、ただ新鮮さや物珍しさが連続した。ただ、ただ目の前に現れるものを受け入れていたように思う。

次の一年は少し考えるようになった。ああしてみようか、こうしてみようか。試してみたことがいくつもあった。失敗もあり、大成功もあった。失敗してもやり直す時間もあるから、失敗も恐くない。色々な意味で挑戦の年だったろうか。

三年目に入り、これを続けてみようかというものが見え始めた。なんともゆつくりのペース、こんなのでいいのかと思いつつ、挑戦と継続の一年になった。それらの挑戦や継続は、自分のためだったり、家族のためだったり、少しばかり仕事のためだったりした。そんな時間の使い方がいかにも人間らしく感じられて嬉しい時間に追われていない。

四年目を迎え、退職者のベテランの域とは言えないが、それなりの年数を積んで「退職とは」を少しは話れるようになってきたのかもしれない。しかしながら、退職後まだ再任用で現場に残っている仲間もいる。それぞれに考えがあり、現場に残る者もあるだろう。わたしは自分の選択が今の生活であったということだ。そして、少し偉そうに三年間を考えた。

四年目の今、本当は、まだこれをやりたいというものに着手していない。いや、実は少しは手を出したが、途中で止まってしま

っている。この先、それが再開されるのがいつになるやらわからないが、きつとまた始める時が来る。この三年間の中でチャンスがあったにもかかわらず、半歩しか踏み出せなかった。それは、自分の意志で止めたのではなかったが、止めざるを得なかった。うーむ、言い訳かもしれない。今は、「それ」をいつ、どのように始められるのか、計画的に進めている訳ではない。そのチャンスが到来するだろうと密かな期待を持ちながら夢見ている。少しばかり定着し始めた、その後の生活の中できつと、その時という瞬間がやってくるだろう。それをじっくり待とうと思う。流れる時間はゆっくりであり、まだまだ十分にある。

東京都中

東京都公立中学校退職
教頭・副校長会



pixta.jp - 49909282

「今日に生き明日を夢見る幾山河」

平成四年退職 老川 隆

「退職後は日本画を学習する」
山水画やしょうぶ、ききょうなど季節の花を描くときは顔彩

でかくのが私の感性にあうようです。しらすしらすのうちに取り組んでいった。

この三十年間で風景、人物、絵物語などを掛軸にしたのが八十本ほどになった。

表装は専門の業者で浅草にある宝研堂へたのんだ。できた作品は東京都教職員生涯学習

展に出品している。この会は例年八月に九段にある千代田区の会館で行われて「ふれあい展」ともよばれていた。作品は絵画、書道、折り紙、写真などの分野があり、小・中・高等学校の元教職員が参加していた。

私はこの会に初めから加わっていて本年は十五回になる。教育庁の福利厚生課長他も出席

していた。いつの間にか私も古くなつて会の始まりと終わりのときにはあいさつをするようになった。次はその一つを示したものである。



「開会式のあいさつ」

みなさま方の作品を一つ一つについて拝見させていただきましたが、感動いたしました。それは教職の道をはなれてもおかつ生きがいと誇りをもつて一つの道を求めていこうとする姿を感じたからです。作品というものは心の反映といわれていますがとにかく美しい。もうどうにもとまらなく美しいと思えました。人生に花を咲かせましょう。

ふれあいの会は自分の良さを見出して会話をするところなのです。どうかこの心をいつまでも持ちつづけて来年もよい作品をたくさん出るとを期待しております。

「悠々自適の中で短編小説を書いてきた」

全国教職員の雑誌「文芸広場」へ小品を投稿して自分の思いを表現していた。「飛鳥のあけぼの」「木曾義仲」他などの歴史短

編、特に「明治維新の真実」を書いた中で現代社会がよくつながつていることがよくわかった。

嘉永六年にアメリカのペリーが軍艦で浦賀に来て国交をすることを幕府に要求してから十五年後に徳川幕府が倒れて明治新政府ができたのは驚きである。その間に安政の大獄、日米通商条約の調印、大政奉還、薩長の台頭、京都での御前会議、江戸城受取りとなつて明治元年(千八百六十八年)になる。明治四年に近代国家日本の誕生としてあらゆる法令が発令されて国民すべての子弟が教育を受けることになる。この時代はそんなに古い話ではない。それから大正、昭和へとつながつて日本の大変革が行われてきた。

日清、日露戦争、そして日支事変の争いから太平洋戦争と終戦までは七十六年間であ

る。平成二八年は戦後七二年であり、平成二九年は超近代国家の始まりとも言えないこととはない。日本は七十年ごとに大きな変革が起こる国とも言える。



ま、このようなことを「文芸広場」に毎月のように投稿して六、七年間つづけた。この原稿がもとになつて左記の本を作った。日本書紀物語、継体天皇、木曾義仲と巴御前、幾山河越さりゆかば、歌集あかねさす「日本の国づくりと精神風土をつくった大王たち」飛鳥のあけぼのなど。文芸広場の全国集会在例年八月に東京浜松町の竹芝港にあるアジュールホテルにて宿泊研修会があつて、交流が盛んであつたが、今はもう実施しなくなったが、文学好きの人にとってよい存在だった。

「私の人生計画を振り返る」

私は十五歳ぐらいから中学校の教師になつて相手も教師で二人して共働きをして家庭つくりをしていこうという気持ちがあつたので成人してから計画を実行してきた。

東京生まれと育ちの四代目の長男であつたので、親の庭に別棟を建てて親と共に住んだ。子育ては親に協力してもらつた。

ずいぶん助かった。五十歳の時、自己資金で全面新築をして広くゆ

つたりとした家を作った。二階だけでも中廊下をはさんで六つの部屋をつつた。

退職後は経済的に困らないように周到に準備をした。職を離れたら好きな趣味の会に入つたり、本をたくさん読もうとした。

中央公論社の日本の歴史集、河出書房の古典日本文学全集重要文化財画集、伊東深水全集を見た。退職都教職員の短歌会をつくつて二十一年間も会長をやつた。選挙管理委員会の立会人、地域代表をのべ十二年間務めた。

自分の歩んだ道をふり返ると「人生は人の心を見出していくことをくり返していく旅」と考えることもある。旅もこれからまだまだ市井の一員として続いていくのであろうか。人生は味わい深く広い。



秋田県

秋田県公立小中学校

退職教頭会

「そだねー」に思う 秋田市 鈴木 列子

冬のオリンピックで大人気だったカーリング選手の間で交わされた「そだねー」は、メダルファイバーで今年の流行語になりそうである。カーリングとして初のメダルとなった「銅」の獲得は、地元北見市はいうまでもなく日本中が喜びに沸いた。

あまり馴染みのなかつたこのスポーツをゲーム感覚で興味深く観戦してきたが、氷やストーン的位置の読みや正確なショットやスリーの技などとても難しそうであった。それなのに選手らは、相手の一

石で想定外の緊迫した状況に直面したとしても皆な明るい笑顔で訛ながら「そだねー」と交わし試合を続行していた。

「そだねー」は、相手に同調する言葉であるが、五人チームとはいえ、数多くの試合場面では、読みの食い違いや意見のそごが生じるこ
とが多々あっただろう。それぞれの持つ個性が生かされなければなら
ない。この疑問は、後に、取材された主将の三橋選手の「チームは、五
色のカラーで彩れるようにやっていた。チームの力になると思った。ま
とまっているけど決して一色ではない。」の言葉で納得できた。重ねて
きた試合を通して「五人五色」の強い個性がぶつかり合い刺激し合
いながらすばらしいチームに成長してきたのだろう。選手は、帰国して
からメダリストになる夢を抱いていたことをそれぞれ語っていた。その
夢が叶ったのである。今は、いろいろな場面でそれぞれが最高の幸せ
を分け合いかみしめていることだろう。

さて、大チームの退職教頭会は、今年創立三十周年の式典を迎え
ようとしている。私にとっては、十五周年から四度目の式典を迎える
ことになる。当時、百十数名だった会員数が六十数名に減少したも
のの、いまだ会が存続していくことはとても喜ばしく、これまで四代
の会長を中心に会員共々歩いてきた道を思うと懐かしい。

数多くの会議を通して様々な課題に対し、意見交換をしてきた。
それこそ〇人〇色の個性豊かなチームである。激しく討論すること
もあつたが、お互いを読み合い相対化
できる力を育ててきた。三十年の月日
は、過去のものとなったがその間それぞ
れが得たものは尊い。今後の退職教頭
会の一步は、さらにお互いを読みとり
「そだねー」と交わし合えることだ。時
には、「もぐもぐタイム」にあやかり、
「のみもぐタイム」で交流を深めたいと
思っている。



八十八歳の戯言

秋田市 池田健

私は、今年の四月で満八十八歳になりました。妻は、七九歳で黄泉へ
と旅立って行きました。その後、ひとり暮らしが九年になります。
あまりにも急な旅立ちで、当時は、まったくの喪失感で、三カ月間
ぐらいいは「ウツ」に近い状態になり、他人には会いたくない、外には出
たくないという日々が続きました。
ある時、ふと、これでは本当に病気になるてしまおうという思いが強
くなり、八十歳になる正月に、それは真剣に、正に真剣に考えまし
た。

その結果、まずは健康、そしてボケ防止の二つが考えられ、午前
中に、主に健康面を、午後はボケ防止について行動することとし、次
のような具体的なことを決めました。

- 一、健康について
- ①ウォーキングを毎日行う。それをノートに記録すること。
(距離と歩数を)
- ②畑作りをし、体を動かすこと。
- 二、ボケ防止策として

「視写」というか「書写」をし、脳を少しでも働かせ、ボ
ケの進
行を遅らせる。(予防?)
この二点を継続して実行する ことを仏前にて妻に報告し、現
在まで八年間継続している。

この実行が、現在の八十八歳に繋がっていると確信してい
る。
(まったくのひとり暮らしで)
○ウォーキングでは、昨年の五月に、歩いた距離が一万kmに達
し、
当時、北朝鮮のミサイルが一万kmまで飛ぶ可能性となり、アメリ
カ本土まで届くという報道が世間を賑わしました。
私は、この足でアメリカまで?と、ひとりでにんまりしたも
のでした。

○書写では、ノート(大版)二七冊目となる。ほとんど日課 とな

る。特別版として、「弘法大師のころ」と、「方丈 記」を、ノート
にはなく、普通紙に書き、それを冊子にし たりして変化をつけ
たりしています。(筆、へ)でも)

○畑では、毎年、十四〜五種類の野菜を、無農薬にて栽培し、知
人に差上げて喜ばれたりしています。(とにかく、毎日畑 を見廻り
ます)

以上の他に、週一回のヨガ教室通い、体も心もリラックスしてい
ます。また、吹き矢にも通い、四段位まで昇段しました。

このように、生活に少しでもメリハリを付けながら今日に至ってい
ると思つています。

最後に句にならない、迷句?

「米寿路を、ひとり旅にて、道険し」

佐賀県

佐賀県公立学校退職
教頭会

「内なる自然」

山本章

先日、日課となっているウォーキングで、小城町の西側を流れ
る晴気川沿いを歩いていきますと、何やら青いきれいな小鳥が飛
んでいるのが見えます。「まさか。」と思いつながらよく見てみる
となんと、カワセミです。もつと山深い川では見たことがありま
すが、まさか我が家からほど近いこんなところで見ることができ
るなんて、なんだかワクワクしてしまいました。また数ヶ月前
には、コソツツと木を叩くような音が我が家の外から聞こえてきま
したので、そつと窓から覗いてみると、枯れた柿の木を小鳥が夢

中になつて？つづいていました。山でもないのにキツツキがいるのかと不思議に思い調べてみると、これはコゲラというキツツキで、街中の公園などでもよく見られるとのことでした。ただ私は初めて見たわけで、この時も心が躍る思いでした。



ネットより引用

思えば子どもの頃から豊かな自然の中で様々な生き物達と接して心を躍らせて来ましたが、虫・魚・鳥・動物・・・様々な生き物との出会いや自然の中の体験がどれだけ私の心を高鳴らせてきたことでしょうか。今でもはつきりと覚えているのは小学校の時のタマシとの出会いです。

それまでウバタマシという茶褐色の虫は何度も捕まえていたのですが、黄金色に輝くタマシには一回も出会ったことがありませんでした。それが或る時、遊びに行った小学校の校庭の木にはありませんか。興奮を押さえて何とか捕まえようとしたのですが、残念ながら逃げられてしまいました。残念無念です。

その後も、実に様々な自然体験が私の心をワクワクさせてくれました。高校生の時久住山で出会った草原の中に立つキツネ、大学生時代に日本アルプスで四季折々に出会ったライチョウ・オコジョ・カモシカ・クマ等々。

私は、こうした自然の中での生き物との出会いや様々な体験は、人の心を穏やかにし、ストレスを解消させる大きな要因ではないかと思っています。生物としての人間が健やかに育っていくには、こうした自然体験がどうしても必要だと思っております。

縁あって、週に2〜3日、県内の小中学校にスクールカウンセラーとして勤めさせて頂いており、そこで多くの子ども達と接しています。不登校・荒れ・不適応等々、各学校では年々課題が増えてきているようですが、その一つの要因として、子ども達の自然体験の減少があるのではないかと私は思っています。

霊長類学者の河合雅雄氏は、その著書「学問の冒険」(岩波書店同時代ライブラリー)の中で「内なる自然」という言葉に言及しています。氏は「私は長い進化の歴史によって、人間の基底部に着床しているはずの感情や意志や、あるいはローレンツ(動物行動学者)らの言うプログラムされた行動型など、もろもろのものを指して『内なる自然』と呼びたい。」とし中学生のホームレスの人たちへの襲撃事件やコインロッカーへの乳児遺棄等々の様々な事件について「内なる自然の破壊」が起こっているのではないかと指摘しています。そして、その破壊を食い止めるためには、「命あるものとの対話」を通して人間の心の中の深奥にある内なる自然に気付く体験を積み重ねるしか方法はなさそうだと述べています。ただ、この「命あるものとの対話」とはそんなに難しいことではなく、自然の中で、花を見て美しいと感じたり、動物や虫を追いかけ楽しんで感じたりする、そうした自分の心に自然に湧き起る反応なのだと述べています。そして「学校から帰れば、あてがわれた自分の部屋に閉じ籠り、テレビやラジカセなど、ありとあらゆる密室文化製品に囲まれて一步も出ない生活の中からは、内なる自然の腐食した子供が出現してもおかしくない。」と記しているのです。

この本が出版されたのは一九八九年で、三十年近くも前のものです。いうまでもなく、現代の子ども達(あるいは大人も)は、当時とは比べられないくらいバーチャル世界に浸りきっています。内なる自然が腐食する危険は更に高まっていると言えるでしょう。

カウンセリングは直接自然体験をしたりするわけではありません。しかし、カウンセラーと出会い、様々な体験をする中で、自分の心に自然に湧き起る反応を見つめて行き、人間が本来持っている「自己成長力」「自己治癒力」を活性化させるのが基本だと私は思っています。いわば「内なる自然」の力を引き出すことでその人らしい本来の生き方を援助するということなのだと思います。

大規模に子ども達に自然を体験してもらったりプログラムを

考え出したりすることはなかなかできませんが、カウンセリングを通して、人が本来備えている生物としての力「自己成長力・治癒力」に「内なる自然」に子ども達が気付けるよう、これからも努力していきたいと思えます。カワセミからえらく話が飛躍してしまいましたが最近私が考えていることを書かせて頂きました。

「カレーシユーウ」

山本 三夫



年齢を重ねるにつれて健康について意識するようになった。我が家の健康法はウォーキングと温泉である。先日嬉野温泉の近くの隣の温泉地に行った時のことである。

夕方七時頃着いて脱衣場で服を脱ぎ始めた時のこと。一歳半か二歳半ばかりの男の児が、「じいちゃんど？」と言って入ってきた。赤い大きな亀の字のTシャツを着て。(後で息子に聞いたら、ドラゴンボールというアニメ漫画の主人公の恰好だそう)しばらく探し回りすぐに消えた。ところが、私が未だ脱ぎ終わらないうちに再びやってきたのだ。私と二人だけだったので無意識に言葉をかける。

「じいちゃん探してるの?」「その籠に入っている服はじいちゃんのとじゃなかと。脱いだ衣類はたいいていボックス式になっていて百円入れて閉め、開けると戻る仕組みで、外来者は殆どそれを利用して、地元の人以外滅多に脱衣籠に脱ぎっぱなしにはしない」と、その児は籠に近づき衣類をつかんで鼻のところを持つてきて匂いを嗅いだのだ。衣類を目で見て確かめるとばかり思っていただけにびっくりである。その児は安心して戻っていった。多分祖父母に連れられて温泉に来たのだろう。お湯には、

ばあちゃんと入り、退屈してじいちゃんを探しに来たと推測される。

じいちゃんが何を着ていたか分からなくても匂いで識別できたのだ。驚きと同時に微笑ましく、何とも言えない感動が込み上げた。また、人間の持つ動物的嗅覚が、幼い子供には未だ残されていることを知って嬉しかったのである。

このことを息子夫婦に話したら、保育士をしている嫁が、保育園では落し物のタオルやハンカチは「誰のねー」と聞くと園児たちはすぐ匂いを嗅いで「これは誰々ちゃん」と答えるとのこと。記名はしてあっても読めない園児たちは嗅覚で識別するのだそうだ。

同じことをバレーボール仲間の会合で話したら、時々だが中学生でも匂いを嗅ぎ分けて誰のものかを識別することだった。嗅覚による生活の実際がまだまだ残されていることを改めて知ったのである。

匂いといえば、友人から、小咄としては余りにも出来すぎていて創作かもしれないが、無知の滑稽さ、悲哀が伝わってくる話を聞いた。簡略に述べると、「久しぶりに博多へ行く用事があって出かけた。昔は悠々と車で出かけたものだったが、七十歳も過ぎたので、姪浜まで車で行き電車で博多に向かった。電車は次第に混んできて押されるように人込み。気付いてみたら若いOL風の女性二人が間近に。それこそ数十年ぶりに嗅ぐ若い女性の香り。年甲斐もなく緊張している自分に気付いた。」と、その時である。

「これってカレーシユウよね」と、T人の女性がポツリ。間違いなく自分のことだと思った。「俺は今朝カレー食ったかなあ？」と考えた。家に帰って奥さんに聞いてみた。すると、奥さんは大笑いして、「あんた何ば言いいよとね、今朝干物の炙ったカレーば食ったやんね」何とも幸せな夫婦である。意味と取り違えてあることを気付かず、腹も立てず過ごせることは何と素晴らしいことではないか。「加齢臭」と電車の中で言われたことを気付いていけば、一日中不愉快な思いをして過ごしたに違いない。家に

帰って奥さんに聞き、奥さんがまた上手く合の手を打った。下げまでついた切なくも微笑ましい話である。

先の子供はその後どうしたろうか。多分じいちゃんは牛乳やジュースをおごり、満足した孫は、じいちゃんの背中で眠ってしまったであろう。大好きなじいちゃんの匂いを嗅ぎながら。親子の断絶や意思の疎通など無縁の仲睦まじい、心温まる家庭が見えてくる。

後の小咄。上手く下げまでついでと言ったが、奥さんのさりげない機転と解した方がいいと思う。「カレーの匂いじゃなか、あなたの加齢臭のことたい」と言えば、実も蓋もない。年寄りも十把一絡げにして「加齢臭」呼ばわりする世間を、夫婦一緒になつて恨んでも仕方がないのだ。

「干物の炙ったカレーば食うたやんね」と、笑い飛ばした奥さんの度量、優しさ、思いやりが心に沁みてくる。多分今後は、夫の外出する前の晩は風呂を勧め、朝の外出の際は、「シユ、シユ」と香りのスプレーを。そんな奥さんの姿が想像されるのだ。

古来日本にはニオイの文化が受け継がれてきた。快い匂い、嫌な臭いを、匂、臭と使い分け、その判別は嗅ぐ人の主観である。我々は生きている限りニオイの世界から逃れられない。

ならば、華麗聚諸君、各々の色や形、匂いを個性として、誇りをもつて輝かせようではないか。一陣の、薫風を巻き起こして。



静岡県

静岡県公立小中学校
退職教頭会

様々な分野で活発な活動

富士・富士宮地区 佐野 賢

富士・富士宮地区は現在三八名で組織され、会としての活動は年二回の親睦会(総会を含む)のみですが、会員それぞれが居住地域において社会貢献活動や趣味活動を通して生きがいをつけています。

六月の親睦会の参加の有無をお聞きした葉書に近況報告をしていただいたものを以下に数通紹介します。それぞれの生き生きとした活動を実感していただければ幸いです。

○今年もT小学校で理科授業だけの講師をがんばってやっています。(加藤)

○朝、ラジオ体操の後、ウォーキングや庭の草取りをし。体力維持に努めております。(中田)

○趣味展に向け、必死になってキルティングに取り組んでいます。(秋山)

○孫の引き取り、プール、ピアノ等アッシー君に忙しい毎日です。(池田)

○本年度地区の区長会長となり忙しい日々を送っています。(望月)

○会社に就職し、丸二年経過し、仕事もマスターしました。同僚と楽しくやっています。(二俣川)

○自作の箸を利用した料理作りを楽しくやっています。(川原崎)

○今年より町内会長の仕事が入り、会議等に追われる毎日です。地域の方々と交流があり、やり甲斐があります。(角田)

○季節の野菜作りに夢中です。作業記録をもとに仕事の質と計画性の向上を図っています。晴耕雨読の生活です。(志村)

関係上、紹介できないのが残念です。私も地区の福祉活動を頑張っています。

退職してからの思い 副会長 深潭 孝俊

退職してから、九年たち、副会長も二年目の現在です。朝、「園長先生おはようございます。」と挨拶をしてくれます。この声を聞くと、一日の活力がわいてきます。

幼稚園の砂場は、園児たちにとつての社交場です。砂場で遊んでいると、年中さんの子が「そのおもちゃ貸して」と年少さんの子に言いました。年少さんは、使っているおもちゃを砂の中に隠してしまいました。年中さんは、もう一度「おもちゃ貸して」と言ってきました。しばらく相手を見て、そのおもちゃを砂の中から出し、貸してくれました。しばらく相手を見ていたこの時間は短かったけど、初めての体験が多い年少さんにとつて、とても長かったように感じました。少ない体験の中で相手を見ることは、自分中心の生活から、周囲の環境に合わせ、他とのつながりを体験しているように感じました。

今まで見えなかった一人一人の良が見え、育ってきた環境の違いから生まれてくる姿が、集団の中に入ることにより、多くの葛藤を呼び、遊びの中で自分を生かしていく姿が見えてきます。先日講師の先生から「保育とは、こんがらかつた糸をほぐすような地道で根気のいる仕事である。糸を切らないように心をひたむきに傾け気長に丁寧には、一本一本優しくほぐさなければならぬ。一人一人の子どもの成長発達を保障する保育を行うことは容易なことではない。」と話されていました。

子どもを育てることは、今も昔も変わらない難しさが続いていると思います。

幼稚園に勤めておりますが、目の前の園児一人一人を大事に、大切に育てていかなければならないと考えています。それが、一つの社会貢献として、次につながっていくばとを考えています。



三重県

三重県公立小中学校 退職教頭会

忙中閑あり

いなべ支部 小坂 三男

ゲートボールの普及発展に精を出していた頃、隣村のお寺の坊守さんに「小坂さんは文武両道やね」と褒められたことがある。短歌教室に入っていることも知ってみえたのだろう。僕は擦った気持ちだったが、運動、読書、対話することをモットーに活動を始めていた矢先のことだったので少々得意にもなっていた。

年月の過ぎるのは速いもので退職後三三年にもなるので振り返ってみることにする。

さて、運動は、僕から切り離せない。散歩、ラジオ体操は毎日の日課である。これにもまして、農作業は、僕の体を強靱なものにした。山あいに六反余ある田を守る為に二五年農に携わった。でも、有害鳥獣には勝てず山(荒地)にせざるを得なかった。体を動かし、頭を働かし、会話を弾ませるものにゲートボ

ルがある。僕は、ゲートボール競技の規則や、審判実施要領の小冊子を念入りに読みまくった。僕なりに納得し期待した。区設のゲートボール場では区民の愛好者が毎日練習に励んだ。北区で六チームを組むことが出来て競技大会も開くことができた。僕は、審判員一級を取得した。そして、大安町、いなべ郡会長、北勢支部長に県連副会長等々を歴任した。ゲートボールの会員として自負できることであつた。優勝回数もふえて他チームから羨望の的となつた。僕は九二歳を迎え体力・気力の限界を感じて三十年間お世話になつたゲートボールから退会することになった。残念極まりないことだつた。

詩吟(岳風流)には退職三ヶ月前から在籍していた。学ぶべきことばかりだつたが声の出ない僕には引け目を感じるが多々あつた。けれども、一応師範になることを許され、教室の指導にあたつていたが八十歳で退会した。

今、現在も続けているのは漢詩づくりの教室である。数え年七十歳になつた時、詩吟仲間から誘いを受け、知立の水谷先生から御指導を受けることになつた。

教室は、四日市にあつたので毎月、車を走らせて学習に専念した。このことが機縁で僕を中心にした漢詩づくりの教室で男2人女7人で支え合い学びあつていく。

鈴鹿市にある「歌と人」短歌会に入会したのは、平成二年だつた。近くに住んでみえる小森さん、筒井さんたちの足手まといになつたと恐縮している。十年あまり毎月一首を目標に作歌を心がけた。「歌と人」にのせていただいたのを平成一七年に短歌集『源太川上流』として上梓することができた。

この外に上梓したものをあげておこう。

- 平成一五年 漢詩集『自然礼賛』
- 平成二二年 漢詩集『自然礼賛』
- 平成二三年 合同漢詩集『八吟調』

もう一つ、どうしても書かなければならないことがある。それは、平成一二年に、愚妻の心臓手術(冠動脈)、その後うつ病に続き、所謂認知症と診断された。僕は娘(桑名へ嫁いでいるが子供はいない)と介護体制を整えた。娘は、土日の休みもなく石

樽の家へ来てくれた。掃除洗濯介護こまごましたことと買物などを引き受けてくれた。僕は炊事介護、誰かは家にいることを話し合つて決めた。僕の勝手ゲートボールの試合、漢詩づくりへの出席等は娘が制限しなかった。ありがたかった。なお、ここで、特筆しておきたいのは、ホームヘルパーさんの活動サービスを受けていることである。週三回の入浴介護ほんとうにありがたかった。病妻は、入浴をこよなく喜んでた。去年一月中旬に娘は脳出血で倒れた。僕は、その後七ヶ月ひとりで介護にあつた。心細いけど仕方がない。名古屋の長男が週二回、隣に住む次男が毎日手伝つてくれた。

妻の介護どころか僕自身が体力、気力がおちこみ、ふらふらになつてきた。娘はまだ来てくれない。長男、次男が病妻を入院させてくれたのでホッとした毎日を、今は送っている。

「一九四五 占守島の真実 少年戦車兵が見た最後の戦場」から戦争を考える

桑名支部 谷口 親子

七二年目の終戦の日の少し前、NHKの番組「インパール作戦 この無謀な戦い」を見ました。「インパール作戦」という名前は聞いたことがあつたが、どんな戦いであつたか詳しくは知りませんでした。それとともに北方領土でのソ連との闘いについては全く知らないという事に気がつきました。つまり戦争について私が知っていることは本当に少ないということを改めて知らされました。

私の父は終戦時満州におり、シベリアに抑留され、五年後に帰還してきました。かつては抑留当時の戦友と会を持ち年に一回は参加していました。戦争の話もよく聞いたし、割と身近に戦争があつたにもかかわらずです。

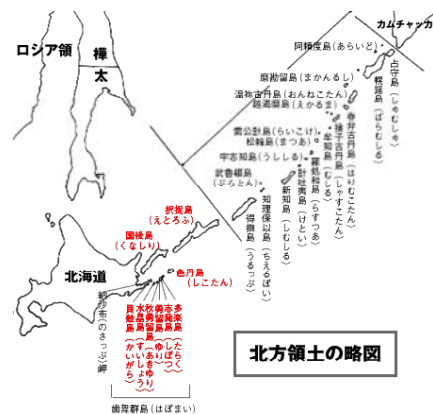
しかし憲法改悪が現実になりそうになり、戦争の足音が聞こえてきそうな今、改めてあの戦争がどう起こされ、どう進み、

そして終わったのか知らないことが多く、もつと知り、考える必要があると思ひ始めました。

そんな時書店で「占守島(しむむしゅとう)の真実」という本が目に入りました。「占守島」という名前は聞いたこともありません。千島列島は大小十六の島があり、占守島は最北の島です。最南が歯舞になります。本の帯には「終戦後、千島列島に侵攻したソ連軍を撃破！日本を救った男たちの激闘」と書かれています。日本軍としての最後の、そして北方領土を失うことになった戦闘です。千島列島の最北端の島「占守島」で上陸してきたソ連軍と日本軍がどう戦つたのか、そして停戦、思いがけないシベリアへの抑留、帰還について旧日本軍少年戦車兵小田英孝氏を主人公として話は進められています。この戦いは終戦後の八月一七日から停戦になつた二十日までの戦闘です。終戦になつたにもかかわらず、この何日かで三百人も日本兵が戦死し、生き残つた兵はシベリアへ向かわされました。スターリンは南樺太と北千島を占領後、北海道侵攻作戦を予定していました。これを諦めたのは最大の理由としてトルーマンの拒否もありました。が、軍事的には占守島と日本軍の命をかけた抵抗があり、三千人もソ連軍の戦死者を出したこともあつたと考えられるということです。

こんな闘いがあつたのです。終戦になつてからもこんなに多くの兵士が戦闘でなくなつたという事に驚きました。しかも占守島で戦つた兵士たちは自分たちが何としてもここを守り、最後まで戦うという自らの意思で行動したということも驚きでした。私なら終戦になつたのだから戦うことは必要がないと考えます。この時代に生きた人たちの思いをもつと知ること

で私たちがこれから戦争についてどう行動していくのかがわかるような気がします。今後も戦争についての本をもつと読み、今の流れを止めていくように自分の考えをしつかりと確立したいと思ひます。



ネットより引用

富山県

富山県公立小中学校 退職教頭会

囚われてしまうこと

関隆司

『万葉集』の最後の歌は、天平宝字三年(七九五)正月一日のもので、因幡国の長官大伴家持が、国庁に部下を招いて詠んだ歌である。

『万葉集』の原文で示せば次のようにある。

三年春正月一日於因幡国庁賜饗国郡司等之宴歌一首
新年乃始乃波都波流能家布敷流由伎能伊夜之家余其膳
△新しき 年の初めの 初春の 今日降る
雪の いや重け吉事△

『万葉集』の中に、正月一日の歌はこの一首しかない。ところが、この歌が存在するために、奈良時代の正月元日には、各国庁で長官が歌を詠むことになつていたと想像してしまうのだ。確かに古代において毎月一日は、京にいる官人がすべて天皇の前に並ぶ日であつた。しかしながら、その時に和歌を詠む習慣があつたという記録はない。